

連作小説 2

亡き王女のための刺繡

小川洋子

兵隊、天使、数字、アヒル。美しい刺繡をほどこすお針子のりこさんに、私はいつも、出産祝いのおかげをお願いする。りこさんとの出会いは五十年前、私が子供だった頃……。

出産祝いのよだれかけを買うため、土曜日の昼前、りこさんの店へ行った。合唱クラブでお世話になっている指揮者のお嬢さんが、先週末、女の赤ちゃんを産んだのだ。臍の緒が足首に絡まっていたうえ、四千グラムを超える大きさだったせいで、四十二時間も苦しんだ挙句、最後は帝王切開になったらしいと皆が噂していた。

たとえどんなに縁の薄い人であっても、赤ん坊が産まれたと聞けば必ずお祝いを贈る。血のつながらりもない遠い親戚、仕事で一度きり一緒になった相手、道ですれ違って挨拶を交わすだけの近所の誰か。中には顔さえ知らない場合もある。私はささいなお喋りの間に差し挟まれる、おめでたの一言を決して聞き逃さないし、視界の片隅に映る膨らんだお腹のシルエットを取り逃がすことはない。

贈る相手が誰であれ、品物は最初からよだれかけと決めている。そもそも汚れるための衣類だから、何枚あっても邪魔にはならない。首の後ろで紐を蝶々結びにし、胸元にそれをぶら下げて離乳食を食べている赤ん坊を眺めるのが、私は好きだ。よだれかけは赤ん坊だけに許された特権であり、一番目立つ場所に掲げられるべき勲章である。彼らは遠慮なく、実に堂々とあらゆるものをそこにまき散らす。名前に冠された名誉あるよだれをはじめ、ミルク、重湯、すり潰した青菜、果汁、ふやけたパン、裏ごしした黄身、胃液、鼻血。唇からあふれるもの、内臓から逆流するもの、容赦なく入り混じり、勲章に独自の模様を付け加える。

りこさんの店は町の中心に近い広場に面した、衛生会館と産業会館、二つの建物をつなぐ渡り廊下にある。五十年近く昔、私が子供の頃は真新しい立派なビルだったが、いつしかすっかり老朽化

して人の出入りもまばらになってしまった。しかし広場にできるアルファベットのH形の影は、何年経っても変わりが無い。渡り廊下は仲たがいするものを握手させるかのように、六階建てビルの四階同士をつないでいる。

「ごめん下さい」

「いらっしやい」

「いつまでも寒くて嫌になるわねえ。お変わりない？」

「ええ、おかげさまで。ストーブの火、強くするわ」

「お願い」

「また、例のお品？」

「このところ、立て続けで」

「喜ばしいことじゃないの」

もう長い付き合いなので、りこさんは私がよだれかけしか買わないことをよく知っている。顔を見せれば何も言わなくてもすぐに、真っ白いよだれかけの入った箱を棚の上から下ろしてくれる。

渡り廊下の片側、一列にさまざまな店が並ぶなか、りこさんの子供服専門の仕立て屋はちょうど真ん中に位置している。他がジューススタンドや薬局や文房具屋や、役所の出先機関である会館を訪れる人たちに便利な日常的な種類でまとまっているのに比べ、りこさんの店は多少仲間はずれになつていると言えるかもしれない。

「先生が助役の二号さんだからよ」